

竹内洋 『大衆の幻像』
(中央公論新社 2014年)

岩 淵 美 克*

1. 本書の構成

第1章 大衆高圧釜社会の風景

第2章 政治家と知性

第3章 メディア知識人論

1. 大衆高圧釜社会と知識人

2. メディア知識人の系譜

第4章 歴史に見る知識人

1. 昔日の知識人

2. 岩波文化

第5章 自分史から見る

1. 大学今昔

2. 教養としての歴史

3. 自分史を合わせ鏡に

おわりに

本書は、過去のさまざまな論考をまとめ上げた著作である。第1章では丸山眞男をひきながら、大衆社会論を展開している。第2章では日本政治論を、反知性主義に陥った政治家とそれを可能にしている大衆社会、ポピュリズム社会批判を展開している。第3章では、こうした大衆社会をリードする、メディアなどで発言するメディア知識人を批判し、いわばこうしたメディア知識人が大衆社会を生み出す原動力になっているとする。第4章は歴史に見る知性的な知識人の系譜を岩波文化と関連付けながら論じている。第5章では、大学をはじめとする知性主義の劣化を憂い、知識人としての自らの役割を模索しているように感じる。

今更ながら、著者の教養、博覧強記ぶりには改めて驚かされた。たとえばさまざまな論考の引用も、分野を超えているのみならず、著名な古典から「アサヒ芸能」などの大衆週刊誌まで多岐にわたる。特に本書で展開する現代社会論、現代政治に対する慧眼は、政治学者である自分にとっても目からうろこが落ちる思いであり、またメディア等で情報発信を少なからずしている身としては、大衆社会状況を生み出し、反知性主義に加担しているかもしれないと改めて自制しながら読ませていただいた。

2. 大衆社会について

本書に通底するキーワードは、反知性主義を当然とする大衆社会に対する危機感と、そうした道にならないようにするための「教養主義・知性主義」であろう。本の題名は吉本隆明の「大衆の原像」に由来している。大衆の原像では、大衆は日常的な目先の問題にしか思いを巡らせない存在としている。原像である理由は、実像ではなく理念型として提起することでインテリの自立思想を構築する手段とされていたとする。こうして自立していったインテリ層、知識人は、一方でエリートコンプレックスを感じているからこそ、大衆の代理人や代表者を持って活動してきた。エリート対大衆のフレームの中で、エリートは大衆を指導しながら、大衆社会を形成していったのであろう。しかしながら、このようにして行動していた指導者や知識人はいつの間にか大衆の圧力に押され、大衆の受託者から委任者に移行してしまった。大衆の風見鶏ともいえる存在になっていったのである。すなわち、エリートが大衆を指導するのではなく大衆に迎合するようになった。ポピュリズム社会が誕生することになる。こうした大衆の存在を、著者は「大衆」天皇制ないしは大衆高压釜社会としている。

大衆高压釜社会は、大衆圧力の強度が大きく、かつ及ぶ範囲が広く、恒常的である、とした。したがって、指導していると思っていた大衆が圧力をかける存在に変遷し、その結果エリート、知識人も知性主義から逸脱することになる。その結果として、指導者が率先して大衆からの圧力増幅に加担することで自励作用を起し、大衆御神輿ゲーム型社会が登場する。ここでの大衆は可視的な存在ではなく、政治家もマスコミ人もテクノクラートも、幻像としての大衆を想定しながら活動することになる。現代社会はまさしく大衆高压型社会であるといえよう。

3. メディア知識人について

こうした超ポピュリズム社会を助長するのがテレビ文化であり、そこから生まれたメディア知識人である。その前にテレビ自体が、分かりやすさを前面に押し出すようになっている状況がある。以前、知識人が情報や知識を発信していた真の情報番組や教養番組自体が減少し、情報バラエティ番組が主流となっている。その中で著名人があらゆる分野の現象にコメントするようになっている。もちろん大学教員もいるのであるが、多くは何らかのプロダクションに登録をしているタレント知識人である。しかしながら、視聴者の側は所属プロダクションよりも、過去のスポーツ実績などの経歴、現在の肩書を信用して知識人と認定しながら視聴しているのである。12月14日の選挙後の朝の情報バラエティ番組でも、こうしたタレント知識人が選挙結果をコメントする。それを一般目線と同じだとする視聴者からの支持で、知識人は有名になっていくのである。これこそまさしくメディア知識人たるゆえんであろう。

このようなメディア知識人は本来の知識人だけでなく、全く異なる分野についても知識人と同じ立場でコメントすることになる。当然素人であるから、コメント自体は優しく誰にでもわかることになるのであるが、それは中身があまりないからに他ならない。つまり、反知性主義メディア知識人が形成されていく。こうして祭り上げられたメディア知識人の言動は、当然のことながら大衆にそのまま受け入れられ、それが知識人として認識されていく。これでは確かに、専門性のかけらない専門家が多数輩出されていく状況である。ベルトコンベアーで、オートマチックに生産されていくメディア知識人には、知性を求めてはいけないうし、テレビも知性を求めない。

彼らが標榜する知識人としての矜持はいずこにあるのだろうか。タレントももともとは才能さず言葉であるから、タレントにも慣れないメディア知識人によって、大衆高圧釜社会は成立する。やはり、こうした大衆迎合社会への警鐘は、絶えず鳴らし続けなくてはならない。

4. 民主主義論について

超ポピュリズム社会の登場によって、政治家における「非」知性主義が蔓延することになる。橋下徹大阪市長の「役立たず」の学者文化人という発言に集約される反知性主義的空氣を著者は批判する。こうした政治家によって、日本政治はどのような状況になるのであろうか。

丸山眞男が民主主義の病理とした「引き下げデモクラシー」は、自らが高くなることをせず、他者を自らの位置にまで引き下げることによって批判を繰り返すようなデモクラシーを意味していた。55年体制における日本政治は、国会論戦と言え、政策論争というよりは相手のミスを攻撃することに終始していた感がある。実際はそうではないのであろうが、メディア等で喧伝される内容からは少なくとも政策論争が行われている印象は持ちえない。しかし現代日本政治は、この引き下げデモクラシーよりもさらに劣化した「劣情デモクラシー」社会となっているとする。劣情デモクラシー社会は、「御殿女中の世界のように、「禍福」がもっぱら偶然によって生じるようなところにひろがる。」とした。つまり偶然の禍福を得た政党や政治家に対して、政策論争をするのではなく、それを嫉妬する感情から相手を攻撃する。その例として著者は、2012年の総選挙では、民主党が脱原発30年といえ、20年という党が現れ、「切り下げデモクラシー」が公約になっていたと看破する。

さて、現在の国会の状況である。高い支持率を誇っている安倍内閣の支持理由は、他に適当な人がいないことである。安倍内閣からすれば、いわば「禍福」がもっぱら偶然によって生じる状況である。これまでの国会でみられたように野党はこの状況を、閣僚の政治とカネをめぐるスキャンダルの追及で打破しようとした。政策論争ではなく、欠点をあげつらうだけで対峙しようとしたのである。こうした野党の対応は、まさしく劣情デモクラシーを体現している。もちろん閣僚の政治とカネの不祥事は追及に値する案件ではある。敵失を着くのは政治の常道かもしれないが、国会の重要な委員会の審議に影響が出るような方法では、与党を「引き下げ」ることはできるかもしれないが、野党が国民に評価されることはない。

09年の政権交代は、戦後では初めての本格的な政権交代と評価された。自民党以外の政党が第1党となった民主党政権の誕生が意味することは、長期的には日本でも政党政治が始まるきっかけとなったことである。今までは野党経験のほとんどない与党と、与党経験のない野党が国会論戦を繰り返していた。どちらも健全な政党としての要件にかけていたかもしれない。しかしながらこの結果、与党経験のある野党と野党経験のある与党の間で、いわば健全な与党と健全な野党との間で今回が開かれることになったのである。

前述した結果として、14年末に行われた総選挙では与党が圧勝したと評価された。衆院の3分の2を超える議席を再び得たのである。この解散劇は、誰が見ても第2次安倍内閣の閣僚の政治とカネに関する不祥事に端を発していた。その問題に対して、野党は国会の委員会の中で敵失を突く攻撃を繰り返した。まさしく劣情デモクラシーが行われていたのである。その結果は野党は伸び悩んだ。すなわち敵失を突くだけでは、有権者の支持を得られなかったのである。その意味では、こ

うした劣情デモクラシーを解決するためには、メディアにもその役割を担ってもらうしかない。少なくとも、知性主義への道筋をつける方法を模索すべきである。

「かくて、大衆はもはや背伸びすることなく、・・・、突出した人物の足を引っ張りはじめた。・・・インテリや教養という表象が死滅し、大衆御神輿ゲームに押され、＜下流＞大衆社会がはじまったのである。今その流れをとめるものはない。だとすればわれわれにできることは衆愚までにはなり下がりたくないという密かな意気地を持つくらいだろうか」のくだりに著者の本音が出ていると感じた。